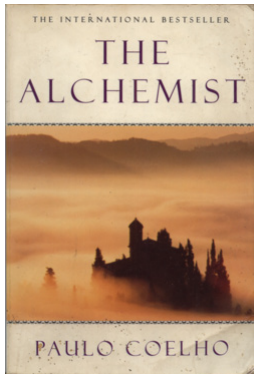


ブック・レビュー

「アルケミスト—夢を旅した少年」

パウロ コエーリョ

リヴェラ陽子



「何かを望めば宇宙はその望みを叶えようとしてくれる」パウロ・コエーリョは「アルケミスト」が出版された1988年以来ずっとそのメッセージを送り続けている。原書はポルトガル語で書かれ、今では65言語以上に翻訳されている。

物語はスペインはアンダルシア地方の広大な草原から始まり、海を越えてアフリカの港町、砂漠の真ん中のオアシス、そして遂にはピラミッドの麓まで読者を誘う。主人公は旅を夢見る一人の少年だ。少年はある日、エジプトのピラミッドに宝が隠されているという夢を見る。そしてピラミッドまで行くことを決心する。

旅の中で、少年は自分の経験や出会う人々から人生、愛、そして夢について学ぶ。好むと好まざるに関わらず、人生がとめどなく流れていくのは本の中だけの話ではない。何があっても人生は進み続ける。人生が始まったばかりの頃は夢がたくさんあり、夢を夢見る時間もたくさんある。しかしながら、本書にあるように「人生のある時点で、われわれは身に起こっていることをコントロールできなくなる。そしてわれわれの人生は運命に身を委ねることになる」と、そう思っている人がいる。この「運命」は”偶然”や”時間”など人知を超える物と捉えることもできる。これはアフリカの港町で少年が出会った商人の身にもまた起こったことだ。商人の商いはとても成功していた。商人にはいつか聖地メッカまで巡礼に行きたいという夢があった。しかし、商人の人生は順調だった。その順調な人生は商人が夢を叶えるために作り上げた人生だった。しかし、生活にすっかり忙殺されると、その夢は次第に一番大切なものではなくなってしまう。商人は身動きがとれない状況に陥ってしまった。商人には今まで得てきた物を手放す勇気も無ければ、だからと言って夢を忘れることもできなかった。

少年もまたオアシスでファティマという女

性に出会った時、この商人と同じ道を辿るところだった。少年はオアシスで働き、ファティマと結婚することもできた。そこで身を立てて良い人生を送ることもできた。しかし、少年はそこで錬金術師にもまた出会う。錬金術師は少年に夢を追い続けるよう説き伏せ自らピラミッドまで少年を導くことにする。少年は錬金術師から前兆の読み方や自然界に存在する言語の理解の仕方を学ぶことになる。錬金術師はまた少年に何かを学ぶ時には行動を通してのみそれが可能だということを教える。必要な知識は今までの旅を通して学んできたのだと。少年と共に砂漠を横断した英国人もまたこのことを学んだ。自分の目標を達成するためには本を読んで方法を考えるのではなく、ただやってみればいいのだということ。錬金術師に会うまで、英国人は鉄を金に変える方法を何の実験もせずただ本を読むだけで探し出そうとしていた。錬金術師に会えば解決するだろうと踏んでいたのかもしれないが、それは甘かった。自分が動かない限り何も動き出さなかったのだ。

人は自分の宝を見つけると、心がわくわくしてそして少し臆病になる。その二つの感情のバランスが崩れたとき、人は壮烈になり過ぎたり、または言い訳を並べ始めたりする。「幸せの秘密は世界に散らばる不思議な光景を全て見逃さないこと。そして、同時に手元のスプーンに乗っている一滴の油の存在も忘れないことだ」そうするためには心の中のバランスが肝要だ。また、旅の途中、本を貪り読んだり、パソコンの前に座っていれば知識が得られるが、人生は実際に行動を起こす時、おもしろくなり始める。大きさも速さも関係ない。どんな行動であれ、動けばもっと素晴らしい知識と経験がやってくる。人生は動き続ける。しかし同時に前兆をもたらす。「宝を見つけるためには前兆を追わなければならない。神は全ての者に道を用意してくださっている。神が残してくださった前兆を読み取るだけでいいのだ」こう語るこの物語自体も何かの前兆かもしれない。奇貨居くべし。ここから先のことは何もかもわれわれ次第だ。